

---

# 世界の果ての島で

引きこもりNEET

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の果ての島で

### 【Zマーク】

Z6907F

### 【作者名】

弓毛一郎もつZEEET

### 【あらすじ】

練習用で初めて書いた小説。ガダルカナル島の戦いを米軍側視点で書いてみた。一兵士から見たノンフィクション戦場体験記風のフィクション小説。マニアックな武器の名前や専門用語は極力避けました。「改行が読みにくい」「つまんねー」「才能ないよ」「死ね」など感想、「J要望があればどんどんどうぞ。元気が出ます。

## 世界の果ての島（前書き）

PCで書いたからPCで読むの推奨。 携帯による閲覧者様への配慮  
は全く行っておりません。

## 世界の果ての島

夜。

見渡す限り大海原。

遠くまでは夜の闇で見えない。

星の光だけの暗い海上を等間隔で列を組み進む船の集団。

私は大きな船に乗っていた。

海上は夜の闇に包まれ月の光で黒く光る海面はどこまでも続いていて奇麗だった。

先程、私の乗った船の向かう先はガダルカナル島と告げられた。聞いたことも無いしどこにあるかも知らない世界の果てだ。

私はその世界の果てにこれから戦争をしに行くのだ。

1941年、アジアの侵略を進めていた日本帝国は突如、我がアメリカ合衆国に戦争を仕掛けてきた。

日本軍はアメリカ海軍の太平洋艦隊の拠点であるハワイのパールハーバーに突然、奇襲攻撃を仕掛けてきたのだ。

この奇襲攻撃でアメリカ海軍の太平洋艦隊は大打撃を受け壊滅してしまった。

以来、太平洋は日本海軍の暴れ放題となり我がアメリカ合衆国はフィリピンを失い、東南アジアと太平洋の島々は日本軍の手に落ちていった。

だがパールハーバー以来、合衆国総力を挙げた艦隊再建の必死の努力でやつと反撃可能な戦力が戻りつつあつた。

そしてついに日本帝国への我がアメリカ合衆国反撃開始の第一歩として本作戦が発動された。

この作戦の目標はガダルカナルという太平洋のどこかにある島の日本軍が建設中の飛行場で、

我々の任務はこの飛行場を日本軍からすみやかに奪取することであると我々兵士は説明を受けた。

「現在、日本軍は本作戦の目標であるガダルカナル島に新たな飛行場を建設中である。

日本軍がこの飛行場を完成させることに日本軍の航空戦力が進出することになると

アメリカ海軍の南太平洋での作戦活動は著しく限定される上、オーストラリアまで日本の手に落ちる危険がある！

今回の作戦は我がアメリカ合衆国反撃の先駆けとなるだけではなく戦略的にも極めて重要な作戦である！」

今回の作戦を指揮する將軍が我が上陸部隊の兵士たちの前で説明した。

この島は日本軍にとって重要な拠点であり相当な抵抗が予想されることのことだ。

南洋の常夏の島は地獄の島と化すであろう。

地獄行きの船にはたくさんの兵士達が乗っている。

不安そうな面持ちで家族への手紙を書いている者、神に祈っている者、はしゃぎまわったりしている者など、いろいろな兵士たちがいた。

いよいよ上陸が近いよしで我々は上陸の準備と武器の最終点検を行うように言われた。

私の中隊の隊員たちはよく訓練され士気も旺盛だった。

「あんな小さな島国の猿がでかい中国相手に戦争始めるなんてワケわかんねーやつらだと思ってたが今度は世界相手に戦争はじめやがった。

イカれてんのか？ジャップってのはまったく理解不能だぜ！」

「まったくだな。ジャップがトチ狂つてパールハーバー奇襲なんてしなけりや

今「じゅべガスで一発当てて金髪で胸のでけー娘嫁にもらひたのによー」

ジャップのせいで太平洋の果ての聞いたこともねー島でバカンスだ  
隣にいたウィルソン一等兵とマイケル一等兵が愚痴を言い合つてい  
る。

しかし見たことのない日本兵との実戦を間近に控えどこか緊張して  
いるようにも見えた。

「日本国民はエンペラーに忠実で命令があれば自らの命さえ捨てる  
「責任をとるときには腹を切る野蛮な人種」  
「日本兵は頑強で我々より少ない食料で我々よりもたくさん歩きた  
くさん働く」

「また器用でずる賢くジャングルなどでの戦いを得意とする。」

「木登りが得意で「ゴム底の靴で足音も無く忍び寄つてくる。」

船で配られたジャップについて書かれたパンフレットを読んでいる  
とウイルソン一等兵が尋ねてきた。

「少尉はジャップについてどう思いますか? ジャップは殺しても殺  
しても沸いてくるって聞きました」

「ばかばかしい。昔、本国のリトルトーキョーでジャップを見たこ  
とがある。

本当に猿のような顔をしていた。中国人よりも小柄だ。そんなやつ  
らが強いとは私は思えんね」

実際の日本兵は見たことがない。  
想像もつかない相手と戦うのだ。

私も本当は不安な気持ちもあつた。

何せやつらはパールハーバーからたつた半年で世界の10分の1を  
占領した奴らだ。

しかし小隊を預かる立場上そんな感情を表に出す事は私には許され  
ない。

それにこれから戦う相手に恐れをなしていっては勝てる戦も勝てない。

そんなときマイケル一等兵が

「おい！中隊のドーソン軍曹が日本兵を見たことあるらしきぜ！」  
と言ひふらしていた。

ドーソン軍曹は隊員たちに囲まれ質問攻めにあつていた。

「フィリピンで日本兵を見たが鬼のような強さだつた」

「日本兵に捕まつたら厳しい拷問を受けた上で処刑される」  
などと集まつっていた兵士達に吹き込んでいた。

そんな時、目標のガダルカナル島が近いのか我々の乗つた船が停船する。

夜の海は神秘的だつたが遠くに見える島影は不気味だつた。  
さながら悪魔の島のようだつた。

夜明けと共にその悪魔の島に上陸する。

夜明け前、地獄の扉をノックする艦砲射撃が一斉に始まつた。

我々が乗つている船の上空を爆音高くやつてきた友軍の爆撃機が飛んでゆく。

私は中隊長の命令を受け部下に上陸の準備を指示する。

私は準備完了と共に隊員達と一緒に上陸用舟艇に乗り込みガダルカナル島に向け出発した。

乗り込んだ当初は遠足気分の隊員が暢気に口笛を吹いたり、小突き会つていた。

しかし上陸ポイントに近づくとともに艇内の空氣も緊張感が増していき次第に会話もなくなつていった。

私自身も表面上は冷静を装つていたが尋常ではない緊張感に襲われていた。

上陸用舟艇のゲートが開いたとき待ち受けるものは日本兵の大軍か

大量の銃弾による洗礼か。

ゴウウン！ガクン！

上陸艇が砂浜に乗り上げる衝撃が伝わってきた。

カラカラカラカラ・・・

ゆっくりと上陸艇のゲートが開く。  
地獄の門が今、開いていく。

1942年8月7日 ガダルカナル島

世界の果ての島（後書き）

文才の無さに泣いた。

## 常夏の楽園のやがな島

上陸用舟艇のゲートが開くと同時に我々は一斉に飛び出しビーチに展開した。

しかし意外なことにビーチに敵の弾丸は一発も飛んでこなかった。

「何か変だぜ、静かすぎる」

中隊のウィルバート少尉が我々が上陸したビーチの異様な静けさに反応した。

「ジャングルの中で我々を待ち伏せているのではないか」とドーソン軍曹は日本軍の不可解な沈黙に警戒した。

「ジャップはどこだ？逃げちまったのか？」

「ジャングルの中から狙つてんじゃねーのか？油断するなよ」マイケル一等兵とウイルソン一等兵も反撃してこない日本軍に不気味なを感じていた。

確かにおかしい。

ここは日本軍にとつても重要な拠点であるはずなのに何故一発も撃つてこないのか？

島を防衛する上で水際で反撃しないなどありえるのだろうか？

ジャングルの中からビーチを狙つていて我々が展開したところを一斉に撃つてくるのかとも思ったがその様子はない。

ジャングルの中に隠れて我々を待ち伏せしているのだろうか。

それとも上陸前に行われた艦砲射撃と爆撃に日本兵は怖気づいて逃げてしまつたのだろうか。

司令部も沈黙する日本軍に対して罷ではないかと疑いを抱きつつもついにこの作戦の第一目標である敵が建設中の飛行場を奪取するべく前進せよとの命令を出した。

我々は中隊集合の号令受け集結しジャングルの中へと入つていった。ジャングルの中でも日本軍の抵抗は無く我が上陸部隊は飛行場へとひたすら前進する。

私はジャングルに日本兵が潜んでいると考えていたが抵抗してくる様子はない。

「飛行場に大軍で待ち構えているに違いない」とドーソン軍曹は日本軍に対する警戒を強めていた。

我々上陸部隊は飛行場にさしかかる。

その時だつた。

ダダダ・ダダ・ダダ  
と、聞きなれない機関銃の音が聞こえてきた。  
敵の機関銃だつた。

「やつぱり来たぞ！」

ドーソン軍曹が叫ぶと

「撃ち返せ！！」

と私は号令して展開し我々は応射した。  
それまで極度の緊張状態に皆おかれしており、いよいよ戦闘が始まる  
と思いつきり日本兵に銃弾を浴びせた。  
我々の一斉射撃を受けると日本兵は装備を捨ててジャングルに逃げ  
ていつた。

マイケル一等兵はあまりにあつたり戦闘が終わつてしまつたため拍子抜けしたのか言つた。

「なんだ、ジャップつてのは大したことねーな」

私自身も、相当激しい抵抗見ることになると覚悟していたのに予想外にあつもなく飛行場を奪取できたため拍子抜けした。

この戦闘の後、皆飛行場をあつさり捨て逃げていつた日本兵を見て樂観的な考えを抱くようになった。

しかしこの考えは後日間違つていた事を思い知られようとは、こ

の時は考えてもなかつた。

話によると島と飛行場を守つていた日本軍は予想よりも遙かに少なかつたらしい。

飛行場も司令部はまだ未完成と考えていたらしいが実際に占領して見てみるとほとんど完成しており驚いたそうだ。  
飛行場に残された日本軍の兵器や車両、機材を集めて調べていた連中から聞いた話では日本製ブルドーザーや製氷機なんて珍しいものまであつたらしい。

我々が占領したこの飛行場はヘンダーソン飛行場と名付けられた。

我々は逃げた日本兵を飛行場周辺に潜伏していないか搜索するべく小規模な部隊を複数組みジャングルに入つた。

ここで最初の困難にあたることとなつた。

用意された地図と実際の地形が一致しないのである。

地図では草原になっているところが実際にはジャングルであつたり、地図にない川が流れていたり逆に地図では高地になっているところがただの野原だつたりした。

この不手際は上陸当初の飛行場周辺のパトロールではさほど支障はなかつたが後々次第に作戦に支障をきたすこととなる。

さらに上陸前は南洋の島と聞いていたこともあり常夏の楽園のような島を想像していたが実際には山やジャングルばかりだつた。

ジャングルの中は昼間でも薄暗く有毒な虫やマラリアを持った蚊などもあり上陸当初の我々にとつては日本軍よりもこれらのほうが脅威であつた。

ただ日本兵に対しても隊員たちは先ほどの戦闘で完全になめきつておりマイケル一等兵に至つてはパトロール中もおふざけしている有様だつた。

しかしフィリピンで強力な日本兵を田の当たりにしたことがあるドーソン軍曹はここに至つても日本兵に対する警戒心を捨ててはいなかつた。

「お前達、あれぐらじで日本兵を侮らない方がいいぞ」

しかし隊員たちはドーソン軍曹の警告にもはや耳を傾けなかつた。「ジャップなんて大したことなかつたぜ。ビビらせるだけビビらせやがつて。

ドーソン軍曹はとんだ腰抜けだぜ」

マイケル一等兵が近くの隊員に漏りしていた。

その時だつた。

我々の頭上に10機、20機、30機と翼を田の丸に染めた雷撃機が爆音高くやつてきた。

「敵機だ！ 伏せろ！」

と、私はとつさに叫ぶ。

しかし日本機は我々には田もくれずにそのまま通過してかなたへ飛んでいってしまった。

直後、日本機が飛んでいった方角から激しい艦砲の砲音が響き渡つてきた。

砲声は翌日まで鳴り続き、この時聞いた砲戦の音は後の戦史に残る第一次ソロモン海戦のものであつた。

## 常夏の楽園のような島（後書き）

戦争体験記風、史実に沿っているという所が本作品と似た匂いを感じたから徳次郎先生のスタンレーに響くを読んでみた。レベル違いすぎワロタ

## 狂氣の島

先日の海戦で友軍の艦隊は大きな損害を受けたようで我々ガダルカル上陸部隊を置いて退避してしまつたらしい。

このため我々ガダルカル上陸部隊は完全に孤立してしまい補給も断たれてしまつた。

補給を断たれてしまつたために食事が制限される事となつた。

隊員たちは腹を減らして任務に当たる羽目になりパトロール中も愚痴が増えた。

そんなある日ジャングルを小隊でパトロールしていると聞きなれない言葉が聞こえてきた。

私はどうぞそれが英語ではないことを判断すると隊員たちに静かに伝える。

「シツ！日本語だ！ジャップが近くにいるかもしけん」

声がするほつを捜索するとジャングルの間から日本軍の将校らしき二人がのんきに食事しているのが見えた。

「チキショー、ジャップめ。俺達は腹ペコだつてのに・・・少尉！あいつらの食事を奪取しましょう！」

マイケル一等兵の進言にそれはいい考えだ。と隊員たちも賛同し私も許可した。

奪取のため攻撃する日本兵の順番と段取りを決めて取り掛かつた日本への1人を倒すといきなり銃撃を受けたもう一人の日本兵は驚いてすぐさまジャングルの奥へと逃げていった。

日本兵の食事は白米に鮭の缶詰と豪華だった。

日本兵から捕獲した食事を満喫して隊員たちも満足そうであった。

元々この島を守備していた日本軍の主力は島の西部へと退避したよ

うで上陸から10日ほどは大した戦闘も無かった。

しかし北部のサボ島から日本の陸軍の大部隊が夜にまぎれて上陸してきたとの情報が入る。

敵の斥候との小競り合いもあったと耳に挿んだ。

上陸してきた日本軍の目的はヘンダーソン飛行場の再占領である事は明白であった。

我々は機関銃を備え付けた陣地を構築しタコツボと呼ばれる敵の銃砲撃から身を守る穴を掘り待ち構えた。

上陸から13日目で日本軍とのはじめて本格的な戦闘を経験する事となつた。

日本兵は是が非でも飛行場を占領しようと我々の陣地目がけて殺到する。

我々の十字砲火をものともせず日本兵の一団が突撃してくる。が、我々の銃撃の前にバタバタと倒れる。

その屍を乗り越え別のもう一隊が突撃してくる。

すぐさま陣地の周りは日本兵の死体だらけになつた。

手榴弾を使って攻撃してくる日本兵や死体を土嚢がわりに撃つてくる日本兵もいた。

別の日本兵は日本刀を振りかざし奇声をあげながら突っ込んできた。日本兵は死ぬのが怖くないのか突撃攻撃を繰り返し日本軍の攻撃はまさに狂気に満ちていた。

私には狂気を通り越して無謀にも思えた。

鬼気迫る日本兵に恐れをなして機関銃を撃ちながら発狂する者もいた。

さすがの日本兵も大量の死傷者を出しジャングルの中へと退散していった。

戦闘が終わった後、日本兵の本性の一端を見た私は言葉も出なかつた。

正直、装備が互角であつたらどうなつていたか分からぬ。

「ジャップは死ぬことが分かつてゐる攻撃を何故してくるんだ？俺にはただのクレイジーにしか見えない」

と隣で機関銃を撃ちまくつてゐたウイルソン一等兵が言つた。  
陣地に備え付けられた機関銃はしばらく銃身から白い煙を吐いていた。

日本軍が大量に残した死体の処理と敵の砲撃でできた穴埋めをする  
よつに命令を受けた。

作業をしていると

「チキショー！ジャップめ、俺達にお前らの仲間の死体を片付けさせ  
るなんて！逃げるなら持つて帰れよ…」  
とマイケル一等兵がぼやいていた。

その後の追撃戦で今回上陸してきた日本陸軍の部隊の主力は壊滅し  
たらしく生き残つた日本兵はジャングルに散開しひの的戦法に転  
じ抵抗し続けているらしい。

我々は逃げた日本兵を探し出し殲滅するよう命を受け部隊を組  
みジャングルに入った。

ジャングルの中を捜索しているとテントのよつなものが見えてきた。  
「氣をつける！日本軍のテントだ」  
とウイルバート少尉が警告する。

ヘンダーソン一等兵が警戒しつつテントへと近づき中を覗くと中は  
日本兵の死体と重傷者ばかりであった。  
半死の日本兵はうめき声を上げ何かを言つてゐる。  
傷口にはウジ虫やアリがたかっていた。  
テントの中はひどい臭いだつた。

私がテントの中を確認しているとウイルソン一等兵が入ってきた。

「これはひでえ。おい、大丈夫か？」

とまだ生きている一人の日本兵にウィルソン一等兵が声をかけ手を触れようとした。

その瞬間その日本兵の目が笑った気がした。

手を触れた瞬間強烈な炸裂音とともにウィルソン一等兵は吹っ飛び私もテントの外へ吹き飛ばされ気を失った。

私が目を覚ましたのはヘンダーソン飛行場にある野戦病院のベッドの上だった。

目が覚めた時にいたのはウィルバート少尉だった。

「ウィルソンは死んだよ。あの日本兵には手榴弾が仕掛けてあったんだ。それにしてもジャップもひどいことしゃがるぜ。

戦友の体に手榴弾仕掛けるなんてよ」

ウィルバート少尉はそれだけ言って野戦病院のテントを出て行った。

## 嵐の島

私の傷は大したことなくほどなく退院となつた。

退院してみると占領したヘンダーソン飛行場には友軍の戦闘機や爆撃機が増強され並んでいた。

さらに地上軍の兵隊や重火器などの増援が次々と到着し我がガダルカナル上陸部隊も万全な体勢を整えつつあつた。

入院中には新たにこのガダルカナル島の近海で海戦があつたようでもたらもや友軍の艦隊は大きな損害を受けたらしく上官たちはピリピリしていた。

私はしばらく前線を離れ防御が硬く安全なヘンダーソン飛行場での勤務が認められていた。

目の前で手榴弾が爆発し目の前で部下が爆死したため精神的静養するようにとの上層部のはからいなのだろう。

しかし中隊がまだジャングル内に潜伏する日本兵と戦っている事を考えると早く中隊に戻りたかった。

私は退院すると同時に中隊と合流する事にした。

しかし目の前で吹き飛んだウイルソン一等兵のことが頭から離れなかつた。

我々が上陸して一ヶ月が経とうとしていた。

そんな頃このガダルカナル島に日本軍の新手が上陸してきたとの話が入ってきた。

今度は前回を上回る大部隊とのことだ。

そんな話が聞かれると同時に飛行場基地内の活動もあわただしいものとなつた。

さらに敵の新たな部隊が上陸したとの情報を聞いた直後からパトロール任務で日本軍の斥候部隊と遭遇する事が多くなつた。

中隊からは負傷者も出た。

我々は敵との大きな戦闘が間近である事を感じていた。

敵の出没が増えて程なくして敵上陸部隊の主力がこの飛行場を目指して移動中の情報が入ってきた。

我が中隊は大隊の他の中隊と連携し、敵を迎撃すべく出撃命令を受けた。

日本軍が飛行場へ向かうルートのひとつと思われる飛行場南部にある高地へと向かう。

ここで日本軍を迎撃つのだ。

高地に到着すると日本軍の空襲があり、私は敵がやはりここ飛行場南部からの突破を日論んでいると確信した。

本格的な陣地を作る事となりすぐさま塹壕と機関銃陣地の構築するようとに指示を受けた。

塹壕掘りをしているとマイケル一等兵はスコッップ片手に補充で来た補充兵と会話をしながら作業をしていた。

「この島に来てジャップとはじめて戦ったが奴らはイカれてやがる。死ぬと分かっていても爆弾持つて突っ込んでくる。近づかれる前に撃ち殺さないとこっちがみちづれだ。

Wilsonもジャップの自爆攻撃で死んだ。奴らは本物のクレイジーだ」

その話を聞いていた新米の補充兵達はこれからどんな奴と戦うのであろうかと、想像もつかない日本兵に若干の恐怖心を抱いているようだった。

日本兵が間近に迫ってきたようができる限りのことはしたが我々の陣地は未完成のまま迎撃つ事となつた。

日が暮れ夜になり陣地で日本兵の夜襲に備えていると、どこからともなく無く照明弾が降ってきて我々の陣地を照らした。

「敵の照明弾だ！銃砲撃に注意しろ！」と誰か叫んだ。

すると轟音が響き尋常ではない破壊力を持った砲弾が陣地に何発か着弾した。

「艦砲射撃だ！隠れろ！」

とつさに私は部下に指示を出し即席塹壕にもぐりこむ。

大口径の砲弾が凄まじい音を発しながら飛んで来るので心理的効果はあつたが日本軍の照準はバラバラで陣地の上を飛びぬけていつたり、遠くに着弾したものがほとんどだった。

マイケル一等兵が「ヘタクソな射撃だぜ」と壕の中で言つた。

私は前回飛行場に押し寄せてきた日本兵と今回の日本兵では決定的に違うものを感じていた。

前回の日本兵には無かつたが今回の日本兵には海上部隊からの支援砲撃や航空機の支援爆撃を伴つての攻撃だ。

敵も連携して総力を上げてやってきたのである。

今回の日本兵は前回の日本兵よりも数段手ごわいであらうと思つた。

敵の艦砲射撃が終わると壕から首を出し陣地を見渡すがたいした被害を受けっていないようであった。

艦砲にやられた者がいかないか「負傷者はいか！」と叫び周囲の部下にたずねた。

その時だつた。

「ジャップが来たぞ！総員戦闘配置！」の号令が出された。

マイケル一等兵も「ついに来やがつた！」と小銃を持って壕に飛び込んでくる。

私も日本兵の襲撃に備えて短機関銃を構えて塹壕の外を見張る。

すると夜のジャングルの木々の向こうから雄たけびが聞こえて來た。その狂気に満ちた雄たけびはだんだん我々の陣地に向かつてせまつて

きていた。

塹壕を守る分隊の部下たちはいよいよ来たかと緊張する。味方の照明弾が雄たけびのするほつへ降り注ぎ日本兵の一団を照らし出した。

その瞬間、陣地に布陣する我が軍の砲門が一斉に火を噴いた。

風の島（後書き）

サブタイ用意してなかつた

## 地獄の島

横一列に並び突進してくる日本兵は我々の十字砲火の前にバタバタと薙ぎ倒されていく。

何が何でもこの陣地を突破しようとする日本兵は我々の濃密な射撃の前に倒れながらもそれをものともせずなおも突進してくる。

日本兵は膨大な損害を出しつつも我々の陣地との距離を確実に距離を縮めてきた。

そのとき私の塹壕側面のジャングルに異様な気配を感じその方向に向かって撃ちまくると一、三人の日本兵が悲鳴を上げて倒れた。するとその倒れた日本兵の死体を飛び越えて数人の日本兵が躍り出てきた。

飛び出してきた日本兵は私の分隊が守る塹壕に銃剣突撃を仕掛けてきたので私は無我夢中で撃ち続けなんとかその日本兵を倒す。他の塹壕も手榴弾や銃剣突撃による肉薄攻撃を受けいくつかの塹壕が突破された。

日本軍の猛攻撃は夜を徹して行われた。

私の分隊が守る塹壕の部下たちはよくがんばり夜明けまで守り抜いた。

夜明けとともに日本軍の攻撃は止むが日本軍は壊滅したわけではなく身を隠してこの高地を突破しようと狙っていた。

さらに中隊から衝撃的な情報を伝えられた。

同じ大隊の別の中隊は日本軍の攻撃によりこの大隊と分断されて日本軍の中に孤立しているという。

戦闘が終わり塹壕にこもる私の部下たちは夜通しの戦闘で疲れきっていた。

士気が下がると我々の命にかかるどころか戦局にも影響する。私はできる限りの励ましの言葉を部下に語つて鼓舞する。

「ジャップ共も我々の機銃掃射であれだけ死んだんだ。ビビッてる奴もいるに違いない」

「だな！小隊長の語りおりだ！今晚も奴らは攻撃を仕掛けてくるだろうが昨日のジャップよりは腰が抜けてるに違いねえ！」

マイケル一等兵も応える。

しかし私は部下たちの士気を維持するためとはいへ口ではそんなことを言つたが内心は微塵もそうは思つていなかつた。

マイケル一等兵も合わせてくれただけである。

今まで見てきた日本兵は勇猛でどんな恐怖にも屈しない。

今晚も必ず我々を打ち砕くべく我々の陣地めがけて突進してくるだろつ。

しかし朝日が昇ると我々が疲れきつていたところに起ることも許されず反撃命令が出される。

我々はジャングルに潜む日本軍に肉薄攻撃をしかけ日本軍を押し戻すことに成功した。

孤立した中隊を救い出すことはできたが日本軍も白兵攻撃で反撃してきましたため昨夜に続き激戦となつた。

白兵戦で多数の日本兵を倒したがさすがに我が中隊からも死傷者が多数出た上、日本兵も激しい抵抗を見せたためついに後退命令が出された。

日本軍を粉碎し切れなかつた我々は日本兵の夜襲に備え新たな防衛線を敷ぐ。

眠ることさえ許されない長い一日を終え日が傾き始める。

日が暮れジャングルが闇に包まれると同時に日本軍は攻撃を再開させる。

日本軍は前日に引き続き雄たけびを上げながら突進してきた。

我々もそれに対し十字砲火で応戦する。

銃剣突撃で押し寄せる日本兵は我々の弾幕の前に次々に倒されいくがいくつかの防衛線が突き崩される。

隠れながらいく日本兵は次々に突破口を見出し我々の火点を迂回して後方へと回りこんでいく。

私が気づいたときには側面を何人も日本兵が通過していた。

「おい！ジャップは横からも来るぞ！何か物音がしたり少しでも怪しいと感じたらそこに撃ち込め！」と部下に指示した。

濃密な十字砲火をたくみに潜り抜け日本兵の突撃波が我が軍の防御陣地の一角に押し寄せる。

日本軍の決死の肉薄攻撃に耐え切れずについに側面を守っていた別の中隊が後退をはじめた。

「ファック！このままじゃ戦線が崩壊するぞ」と、この展開にはマイケル一等兵も悲鳴を上げた。

事実、このままでは日本軍との戦線は崩壊してしまい混戦にならうとしており、それは我々にとつて避けるべき事態であった。

日本軍の突撃波の一波が我々の防衛線にも押し寄せてきた。

機銃陣地に備え付けられた重機関銃がそれを薙ぎ払う。

そのとき私達のタコツボの近くの味方のタコツボに一人の日本兵が日本語で何かを叫びながら突っ込んだ。

その日本兵は我々の弾幕をくぐり抜けそのタコツボに滑り込んだ。するとドドドーン！と複数の手榴弾の炸裂音とともに仲間のタコツボは吹き飛んだ。

「ジーザス！なんて事しやがる！自爆しやがった！」とマイケル一等兵はその光景を見て叫ぶ。

すぐさま私は指示を部下に指示を出した。

「袋を持つた日本兵は最優先で射殺しろ！袋にたらふく手榴弾につめてやがる！自爆攻撃仕掛けてくるぞ…」

「クレイジー！」

日本兵の一撃必殺の捨て身の戦法にジャクソン軍曹は正氣の沙汰で

は無いと叫んだ。

「ヘンダーソン！ジャクソン！ついて来い！残りの者と30口径はここを死守しろ！一人も通すな！」

と言い残し部下二人を連れタコツボを飛び出した。

穴の開いた防衛線を埋めるのだ。

先ほど自爆攻撃を受けた仲間のタコツボを目指して敵味方の銃弾を潜り抜けて走り抜ける。

短機関銃で武装した私と部下二名は無事にタコツボに滑り込んだ。自爆した日本兵と味方の死体がバラバラになつてタコツボの中に四散していた。

タコツボの中は全滅だった。

## 血染めの島

日本軍の攻撃はなおも続いていた。

丘の周囲を守る我々はよく頑張り押し寄せる日本兵を倒し続けた。しかし日本軍は我々の防衛線の隙を縫つて続々と高地に侵入しつつあつた。

我が軍の中央の防衛線は日本兵に包囲されつつあつた。

このままでは一気に高地を守る全部隊が総崩れになる危険もあり大隊司令部から高地に集結し敵の中央突破に備えよとの命令が下された。

高地の防御陣地まで我々が移動するとすでに日本軍は高地のふもとに集結しはじめており我々は迎え撃つ体勢をととのえた。

日本軍は高地に陣取る我々を粉碎するべく総攻撃を開始した。

高地に向かつて日本軍からの一斉射撃が始まった。

丘に陣取る友軍の砲兵部隊や機関銃がそれに対して一斉に撃ち返した。

つづけて日本軍の突撃部隊が絶叫を上げながら丘をめがけて突進してきた。

それを迎え撃ち我々は一斉に射撃を開始する。

打ち上げられた照明弾に日本兵の一団が照らし出されでは我々が撃ちだした砲弾と銃弾がそこへ濃密に降り注ぎ日本兵を粉碎していく。しかし日本兵を倒しても倒しても別の日本兵の一団が突撃してくるという有様だつた。

日本軍もたくみな浸透戦術で我が軍の陣地に肉迫する。

丘を守る我々のあらゆる陣地は日本兵の肉迫攻撃にさらされた。

私たちは無我夢中で撃ちまくつた。

日本軍も何が何でも丘を突破しようと死に物狂いで攻撃を続けた。

戦闘は苛烈を極め我が軍の中央の防衛線が分断され突破されかける。

そのとき中尉の階級章をつけた人物が数名とともに我々の塹壕へ滑り込んできて中尉殿がこう言った。

「少尉！部下を借りるぞ！何名かついて来い！防衛線に空いた穴を埋める！」

ジョンソン一等兵とヘンダーソン一等兵を引き連れ入ってきた数名の部下とともに壕を飛び出した。

中尉自ら先頭に立つて日本兵によつて制圧されたタコツボに肉迫する。

手榴弾を投げ込んだ後、白兵攻撃を仕掛け日本兵を倒しタコツボを奪い返した。

するとまた次のタコツボへと向かい同様にして次々とタコツボを奪い返していった。

この行動を見ていた我々も勇気付けられ大いに士気が上がった。

日本軍の突撃攻撃は止むことを知らずなおも決死の突撃攻撃を繰り返した。

さらに高地後方にも回りつつ丘全体が日本軍の攻撃を受けていた。とうとう後退命令が出される。

我々はいつたん後退し火線保ち日本軍が消耗するのを待つた。それはもうひたすら待つた。

夜明けごろさすがの日本軍も相当数の戦力を消耗したようで突撃攻撃の波も弱まつた。

日本軍は兵力を消耗しきっているのは敵である我々の目にも明白でありこの時点に来てやつと長い戦闘の終わりが見えてきた。

日本軍はどうとう力尽きて日本兵はバラバラに散つて退散していくた。

日本軍の攻撃は失敗に終わった。

翌日には敗走した日本兵の殆どは駆逐され我々は再び日本軍の攻撃から飛行場を守りきつた。

しかし今回の高地での戦闘で我々が日本軍の突破を許していればヘンダーソン飛行場は日本軍の手に落ちていたかも知れない。後から聞いた話によると日本兵の一部は飛行場へ突入していたそうだ。

高地は日本兵の死体で埋め尽くされ我々は血染めの丘と呼んでいる。高地での戦闘の後日マイケル一等兵が言っていた。

「海兵隊のお偉いさんは栄光ある名前だとか言って戦闘を指揮した中佐殿の名前を冠した名前で呼びたがる。

だけど実際に戦った俺たちからすればあれはまさに血染めの丘ですよ。俺たちもジャップも必死に戦つた。」

血染めの丘での戦闘の後ジャングルに逃げ込んだ日本兵は補給がなく我々が遭遇するのは日本兵の餓死死体ばかりであった。

この血染めの丘で我が軍は150名ほどの死傷者を出した。  
一方日本軍は1000人以上が死亡した。

丘での戦闘の後、私は日本兵の突撃の時にあげる歓声や雄たけび、突撃してくる日本兵の姿がずっと頭から離れなかつた。

我々の撃ちだした銃弾や砲弾によって丘のいたる所にハツ裂きや細切れにされた無残な日本兵の死体が大量に転がつていた光景も目に焼きついていた。

私はこの島でのこの状況すべてが嫌になりこの島から一刻も早く出たいと感じるようになつた。

開戦時は正義と自由の為と合衆国をだまし討ちした日本への復讐の為に戦うと決心して出征した。

しかしあはやこの戦争という現実に絶望し次第に早く故郷に帰りたいとしか思わなくなつていつた。

私は志願兵で日米開戦より以前から軍にいたが血染めの丘での戦闘の後、私は帰国したいと強く希望した。

しばらくして精神的障害が認められ除隊が許されることとなつた。

その後本国に帰国し軍を除隊した。

私が戦つたガダルカナル島での戦闘は私が除隊し島を去つた後も年が明けた1943年になつても続いた。

最終的にガダルカナルの戦闘ではアメリカ軍は5000人以上の死傷者を出し日本側は25000人以上が死亡した。

私が除隊した後もガダルカナルでの戦闘やその後の太平洋各地戦場での日本軍との戦いは続いた。

1945年8月、日本帝国は降伏し世界中を巻き込んだ第一次世界大戦が終わった。

しかし日本との戦争が終わった後も私の祖国は朝鮮戦争、ベトナム戦争と戦い続ける。

日本との戦争が終わり間もない頃、ガダルカナルで私と同じ中隊にいたウイルバート少尉と再開したことがあつた。

私の部下だったマイケル一等兵はサイパン島で戦死、ドーソン軍曹もペリリュー島で戦死したとの話を彼から聞いた。

ウイルバート少尉自身はその後沖縄などでも戦つたが終戦まで生き残り少佐にまで昇進したが日本との戦争が終わると同時に軍を退役したと話していた。

私は軍を除隊してからは仕事や住む場所を転々としながらも普通の生活を送つた。

しかしガダルカナルでの戦闘の記憶はいつまでも消えることは無かつた。

特にあの丘での日本兵たちの姿が脳裏に焼きついており忘れられなかつた。

あの丘での戦闘の夢を見て飛び起きる夜がずっと続いた。

普段の生活においても日本兵が突撃の時に発するあの雄たけびがどこからともなく聞こえてくることがよくあつた。

仕事に就いてもこれらのおかげで長くは続かなかつた。  
私は戦争が終わっても障害に悩まされ続けた。

血染めの島（後書き）

オチをもつときれいにまとめたかった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6907f/>

---

世界の果ての島で

2010年10月22日00時14分発行